

子どもが育つ遊び ～0・1・2 歳児の発達に合わせた環境とおもちゃ～

講師 瀧 薫 城東よつばこども園 園長

1. はじめに

環境を作る上で大切にしたいと思うことは、安心して過ごして、心も体も健やかに育つ、そんな豊かな保育環境をどのように作ればよいかということでしょう。子どもがワクワクして「おもしろいな」「関わってみよう」と思えるような環境を構成することで、生活や遊びを通して、心と体と人との関わりを総合的に保育するのが、今の日本の保育の基本原則です。

では、ご自身が幼い頃、いつ、どこで、誰と、どんな遊びをしていたか、思い出してみてください。そのとき何が豊かだったでしょう。私は昭和30年代の生まれです。当時はおもちゃがあまり無かった時代ですが、道具は無くても、空間があり、人的環境である仲間や見守る大人の姿がありました。保育室はくつろげる空間でなければなりません。物や情報があふれている今、私達に必要なのは、断捨離の概念です。何でも入れ込むのではなく、引き算の考え方も必要ではないでしょうか。

2. 保育の環境

では、どのような環境がよいのでしょうか。

まず色は、発達に適していることが大切です。ある研究では、乳児の視力は0.02くらいだと言われています。ですから、はっきりした色合いの方が乳児には親切です。また赤色・黄色・青色・緑色が多いのは、それら4色は生理学上、最初に認知する色と言われているからです。ここで必要なのは引き算の考え方で、このとき床にごちゃごちゃした柄が無い方が、おもちゃが目立つので、子どもにとっては親切です。常に子ども主体で考えると、環境もわかりやすいと思います。

では、保育環境には一体どのようなものがあるでしょう。おもちゃもそうですし、自然素材、地域資源、風、光、すべて保育環境です。でも、あまり広げ過ぎて考えるとわからなくなってしまいます。保育所保育指針（以下、指針）「総則」では、まず「人的環境」そして「物的環境」それから「自然や社会の事象」、これらを「計画的に構成し、工夫し」と書かれています。

子ども達は、起きている時間の多くを園で過ごします。ですから園は、乳幼児にふさわしい体験が得られるように、小学校の先取りではなく、今大切なことを丁寧に育てていきましょう。

近年の保育は、昭和の時代とは随分違います。例えば、以前なら空き地に土管があって、子どもが隠れたり、一人になれる場所がありましたが、今は危険だからと立入禁止になってしまいます。ですから園で築山や一人になれる場所を作り、代わりの場所を用意しています。

今まで地域や家庭に普通にあった子ども達の発達に必要なものが無くなりつつある今、園は最後の砦なのかもしれません。

3. 養護と教育を一体的に

私達の役割は、発達過程を踏まえ養護及び教育を一体的に行うことと言われています。旧指針の「第2章 子どもの発達」には、年齢ごとの発達過程が詳しく書かれていました。今回、3歳未満児の記述が丁寧になされたと言われていますが、以前のような記述はありません。「ある時点で何かが『できる、できない』といったことで発達を見ようとする画一的な捉え方ではない」という考え方にに基づき、年齢の記述ではなく、発達の記述が丁寧に書かれています。

発達過程について「子どもの今、この時の現実の姿を、過程の中で捉え、受け止めること」と素敵な言葉が書かれています。現在の指針は、ある意味、日本の保育が大切にしてきた原点に返ったのではないかと、私にはそんな気がします。

もう一つ大切なこと、それは養護です。では養護とは何でしょうか。「養い、護る」と書くように、まず思い浮かぶのは、育児行為です。おむつ交換をしたり、丁寧に食事介助をしたり、生命の保持と情緒の安定、この2本柱を細やかな配慮のもとで援助する、これを総称して養護と言います。指針には「一人一人の子どもを深く愛し」「子ども一人一人の人格を尊重して」保育を行うと書かれています。子どもはありのままの自分を受け止めてもらえる、だから人を信じられ、自分のことを肯定できる、これはとても大切なことです。

4. 主体的な遊びが成立するために

主体的な遊びが成立するためには「3間（時間・空間・仲間）」が必要とされています。幼い子ども達は物を触りながら発達するので、物的環境と子ども自身の心の在り様、体の健やかさが大切です。そして人的環境、つまり子ども達をどんな存在と捉えているのか、その子達の未来に向けてどのように思っているのか、どんな体験を子ども達にして欲しいと願っているのか、私達の子ども観が問われるということです。キーワードは「子ども理解」です。

皆さんは生きていることが辛いと思うとき、どんな人に相談したくなりますか。一緒にいて心地良く安心できる人、その人はどのように接してくれますか。その人といるとどのような気持ちになりますか。一方的に何かを教え込んだり、良い悪いだけを押し付けたり、そういう人のところには相談に行こうとは思わないでしょう。それは、乳児保育で大切にされていることと同じです。応答的で丁寧な受容的な関わりがあるからその人を信頼できる、これがあるからまた明日も一歩踏み出そうと思える、言い方を変えれば、愛着関係、基本的信頼感や自己肯定感のことです。

5. 乳児保育

乳児保育の話に一番よく出てくる言葉、それは「応答的」です。乳児保育に関わる「ねらい及び内容」は「健やかに伸び伸びと育つ（身体的発達）」「身近な人と気持ちが通じ合う（社会的発達）」及び「身近なものと関わり感性が育つ（精神的発達）」の3つの視点です。1歳以上3歳未満児は5領域で示されます。ですが、1歳の誕生日を迎えて「はい、今日から5領域で」とはなりません。

身体的発達について、指針に「心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであること」と書かれているように、相互に関わっています。目に見える姿「できる・できない」で発達を見るのではありません。皆さんが普段無意識にしていること、例えば、初めに、グライダーポーズやピボットターンがしっかりできるように、ひと呼吸おいて見守りながら待ってみるとか、ハイハイできるようになると、あまり転がり過ぎるものではなく自分で手を伸ばして取れるものを用意するとか、そしてハイハイできる頃には座位もしっかりとれるようになるので、やってみたくなるものを用意してあげるといように、それが結果的に挑戦の課題、最近接領域へのアプローチになります。

「やってみたい」は発達の原動力です。本能的にやってみたくなること、「なんだろう」「おもしろそう」「関わってみたい」「できた」、その先に先生の笑顔があるから自主性・向上心につながっていきます。

精神的発達について、指針の解説に書かれているように「静かで落ち着いた環境の下では（中略）子どもの細やかで敏感な感性が育つ」、つまり保育室が静かで落ち着いていることが大切だと言われています。生活の動線と遊びの動線を分けてあげることが、まず大前提として必要です。

誰でも、管理され、視線を浴び続けるのは疲れるものです。ですから自分だけの場所、自分の世界を確保してあげるとよいでしょう。このような場所を作ると、噛みつきが圧倒的に減ります。噛みついていての子は何か落ち着かない、気持ちがふわふわする、きっと「困った子」ではなく「困っ

ている子」です。

柔らかいものを用意するのもよいでしょう。遊んでいるでもなく、寝ているでもなく、食べているでもなく、何かゴロゴロしたい、園は第2の家庭ですからこういう場所も必要です。ですが、様々な保育環境があり「そんなくつろぎの場所は特別に作れない」ということもあるでしょう。そういうときのお勧めは「おひぎで絵本」です。柔らかくて温かいし、人の声が心地よい体験ができます。この時期に先生と一緒に絵本を見る場面は、基本的に1対1です。ただ実際に1対1で絵本を読もうとしても他の子どももやって来たりして、なかなかそのような場面は作れません。ですが、どうすれば保障できるだろうかと工夫していくことは、とても大切です。

指針に「様々なものに触れ」と書かれているように、柔らかい布や木のような硬いもの、ぎゅっとかむと戻るボールのようなもの、様々な素材、感触のものをいつでも手に取れるように、でも入れ込み過ぎると遊びにくくなるので気をつけながら、たくさん用意してあげましょう。たくさん置くわけにはいかない場合もあるかもしれません。そのようなときは風と光の力を借ります。モビールは風の力を色に変えます。光も大切な保育環境ですが、光が入ってくるだけでは遊びにつながりません。例えば、陽の当たる窓辺に赤・青・黄3色のプラスチックボトルを置くと、晴れた日には床に虹が映ります。虹の橋を渡るなんて素敵だと思いませんか。身近な物を使って工夫してみましょう。

保育室は静かな環境がよいと話しました。次は視覚的なことについて、指針の解説に「この時期の子どもが受け止められる程度のほどよい複雑さをもった環境を構成することが求められる」と書かれています。スロープトイを例に挙げてみましょう。おもちゃのねらいから考えると、ひとつは追視、もう一つは手と目の協応です。それなら動かすコマにだけ色がついている方が、子どもにとって親切なおもちゃです。また、ゆったり転がる方が追視には適しています。それが、専門的な

視点でおもちゃを選ぶということです。

また精神的発達の内容として、指針に「玩具や身の回りのものを、つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使って遊ぶ」と書かれています。発達は体の中心部分から先端部分へですから、これは身体的発達の内容ではないかと思うでしょう。それでもなお精神的発達の内容に記述しているということを私達は深読みしないといけません。精神的な達成感や喜び、そこが大切だというメッセージです。

手や指を使って遊ぶと言えば、ポットン落としがあります。丁寧に発達に寄り添ってあげる方が、喜びが大きく意欲的に遊ぶことができます。「握る」から「つまむ」へ、そして色の概念が出たら「色」を加えたり、手首を使う「向き」を加えたり、あらゆる発達はその前段階をいかに丁寧に踏まえるかが大切です。

子どもはポットンとうまく落とせるとパチパチと手を叩いて自画自賛する、これが大切です。ですから精神的発達のところに載っているのです。

さらに難しくするなら、背の高い容器にしてみるとか、具材にL字やS字のものを用意するとよいでしょう。このように、ポットン落としは具材と容器の組み合わせで丁寧にカスタマイズすることが簡単にできるし、具材の数もそれほど多く必要はありません。

インターネットでポットン落としを検索すると手の込んだものがたくさん出てきますが、それほど装飾に凝らなくても発達に適していれば、子ども達はよく遊びます。穴の形が異なる蓋に変えるだけで、難易度は変わります。ここで必要な丁寧さとは、発達の段階に丁寧に寄り添っていくことです。

6. 1歳以上3歳未満児の保育

1歳以上3歳未満児、つまり1歳児と2歳児の保育が一緒に書かれています。1歳以上3歳未満児の5領域の人達と3歳以上児の5領域になった人達が一緒にいることから、2歳児クラスは小さな異年齢クラスと言えるでしょう。

（１）１歳児頃の世界

１歳頃の世界では、「自分でしたい」という気持ちを尊重し、満足感が得られるように、好きな遊びがたっぷりできる環境を保障しましょう。でも、言うのは簡単ですが、保障するのは難しいです。なぜなら、自我が芽生え、自分の思いが出てくるからです。ですが、乳児クラスとは違う１歳児ならではの姿があります。つもり・見立てが出てくるから、押し箱も単なる押し箱ではなく、お母さんのベビーカーになったりします。

では環境の作り方ですが、５領域が出るということは、幼児の遊びの代表的なものが出そろってくるということです。私の園の１歳児クラスの春の環境構成を例に挙げると、初歩的な構成遊び、微細遊び、食事スペース、それからテラスや園庭、初歩的なお世話遊び、くつろぎスペース、粗大遊び、そして睡眠スペースです。では、このように環境さえ作れば、みんな幸せかというと、そんなことはないのが１歳児の難しさです。

噛みつきは、どうしても出てしまいます。では、なぜ噛みつきは起きるのでしょうか。様々な理由がありますが、特に理由はないことが一番多く、目の前に手が来たからとりあえず噛むのです。ですからゼロにするのは、なかなか難しいです。けれど、とにかく噛まれる子がいないように限りなくゼロにしたい、では、おもちゃと環境でできることを考えてみましょう。

まず、その子が遊びに飽きていないでしょうか。先月と今月の保育や遊びの環境が全く一緒だと、高月齢の子どもなら確実に飽きています。それから、その子の発達に適した「ちょっと面白そう」という遊びがあり、その遊びを十分できる空間や見守りが保障されているでしょうか。例えば、一生懸命積み上げた積み木を誰かが倒しに来る、それが何回も重なったら、誰だって相手を噛みたくなくなるでしょう。

それから、不要なものや情報が溢れすぎていないでしょうか。保育現場は生活の場なので、どうしても物が多くなります。収納スペースにも限りがあります。ですが、できれば子どもの遊びに関

係ないものは子どもの目に入らない所に持って行くようにして、難しければ布をかけて見えないようにしたり、絵本を並べるなら丁寧に綺麗にそろえてあげたりしましょう。お散歩用の救急バッグなど、どうしても置かないといけないものもあります。その場合は、そこに可愛らしい柄を付けるのではなく無地にして色を抑えるなど、そういう工夫もあります。

人的環境こそすぐにできます。先生の声が大きい保育室は、子どもの声も大きいです。例えば、目の前で子どもが遊んでいるのに、先生が向こうの子に「**ちゃん、ごはんよ」と言葉を投げると、目の前の子ども達も集中して遊べなくなります。それから内容です。否定語禁止語はどうしても多くなりがちです。でも文章の形として「走らないで」と否定形で言われるより「歩こう」の方が、言葉を覚え初めた子ども達にはわかりやすいです。大人だって「それ止めといて」と言われたら嫌ですね。

そして、もう一つ大事なこと。「この子は困った子、乱暴な子」という見方を無意識にしていますか。その子が休んだ時、ほっとしてる自分がいるとすれば、そう思っているということです。そして、それは相手に伝わります。

倉橋惣三の著書『育ての心』にある詩「小さな太陽」にも語られているように、太陽は月や地球と違って自ら光っている、私達が小さな太陽のような存在になり、自らその明るさや温かみを与えることができれば、子どもも幸せです。具体的に言うと、その子は何に興味があるのか、その子が遊びたくなるものを本気で考えることが大切です。その子が今、何を面白いと思い、何に心を動かされているのか、少し寄り添ってみたり、何かを共同注視してみても、その子が機嫌よく遊んでいる時に顔を見合わせたり、何かできた時に「よかったね」と共感してみる。そして、仲間である同じ担任の先生やその子のお父さんお母さんにそれを伝えること、これが温かみ、光を振りまくということです。周りが変わってくるとその子も変わってくるし、面白いものを見つけて集中して遊

ぶようになれば、徐々に噛まないようになるでしょう。急がば回れ、です。

指針「健康」に「自分でしようとする気持ちを尊重する」と書かれています。0歳児のときはボタン落としてよかったですが、1歳児を超えてくると様々な道具を使うようになります。2歳になって「お友達と仲良く分けてね」「順番ね」と言うのであれば、まず自我が芽生えたこの頃に、その子自身の秩序感やこだわりを保障してあげることが大切です。また、一つの遊びの中で使うおもちゃ同士の色や大きさ、数が合わせておくと、子ども達は遊びやすくなります。

子ども達は、遊びを通して様々なことに気づいていきます。発達の節目は1歳半、その次は4歳です。1対1対応の他に「中間」の概念も4歳頃に獲得すると言われていますが、1歳半の子どもも遊びの中で気づいていきます。重ねカップの遊びの中で、子ども達は「ちょっと大きい」「2番目に小さい」とは言えないですが、その概念は遊びの中で少しずつ獲得していきます。ですから見通しもついてくるのです。

人間関係では、友達と一緒に楽しくなってきました。お世話遊びのコーナーでは、簡単な模倣遊びが始まります。自分が愛情を受けて世話される、それを再現することの本質は、愛情の迫体験です。行為を模倣することで、やがてその行為の本質に気づきます。例えば、人形を寝かしつけるのに最初はただバンバン叩いたりしますが、やがてその抱き上げる姿が優しくなったりします。おむつ交換の模倣もよくやるのではないのでしょうか。でしたら人形の大きさに適したおむつ交換台やヒップマット、おしりふき、ごみ箱、消毒する物があると、子どもは模倣しやすくなります。そして同じおむつ交換セットがもう1セットあると、横で別の子どもが見て真似をします。

「寝る子は育つ」と言いますが、真似する子は育ちます。ですから、模倣するのに使えそうな道具が必要になります。子ども達は、周囲の環境に好奇心を持って関わり、それをどんどん模倣していきます。また、未熟で自分のこともうまくでき

ないのに、人のことが気になりやってあげようとします。そして、ここで育ち合いがおこってくる、これが1歳児クラスの面白さです。道具が複数あると遊びの真似っこが起きてくる、そしてそこから見立て・つもりが出てきて、ごっこ遊びに発展していきます。

もう一つ、高月齢児と低月齢児では随分違うので「憧れ」が出てきます。周りの子どもの様子を見て「自分もやってみたい」と思っても、なかなか踏み出せないことがあります。でも、その最初の一步を踏み出したときの子どもの驚き、その場に立ち会えることは、本当に嬉しいものです。もし、そういう場面に立ち会えるかもしれないと感じたら、ぜひ動画を撮っておいて、保護者に見せてあげましょう。私の園では、保護者会のときにも、こういう発達の姿や「よかったね」という姿をクラスの保護者の方々と見るようにしています。大人になると、褒めてもらえる機会は少なくなってしまうませんか。ですから「よかったね」とみんなが拍手してくれると嬉しいし、報われた気持ちになります。子育てに喜びを感じられる機会をつくっていきましょう。

一人ひとりの「できた」「うれしい」に寄り添い、生活や遊びの中で共感してもらいながら達成感を積み重ねていくことが、気持ちを立て直す基礎になります。そして「お友達が使ってるから、ちょっと待っておこうかな」「積み上げた積み木、崩れちゃったけど、またやろうかな」と思えるようになっていくのです。

（２）２歳児の姿

2歳頃は、生活、遊び、言葉、社会性、自律心の土台をつくっていく時期です。自分の思いを持って外の世界に働きかけ、その結果に達成感を得たり、失敗しても「もう1回」と気持ちを立て直したりすることができるようになります。

私の園の2歳児クラスの春の環境構成は、お世話遊び、ごっこ遊び、机上遊び、構成遊び、積み木、くつろぎスペース、造形遊びのスペースがあります。2歳児では、何か作品を目的としてつくることよりも、素材に親しむことが大切です。ま

た、この時期の子ども達は、視覚刺激に惑わされて集中できなかったりすることがあるので、壁に向かったテーブルを用意しています。落ち着いた隅のスペースでパズルなどを用意しておく、くり返し楽しめます。

遊びに集中できない子は、「困った子」ではなく「困っている子」です。ですから、落ち着いて遊べる環境が保障されて自分の遊びに十分に向き合えることで、気持ちに余裕が生まれます。これがないと友達と楽しさの共有はできません。指針にも「子どもの発達状態に応じて適切なものを選び」と書かれています。

2歳児クラスで用意したいのは、生活の力に繋がるものです。それも順序性が大切です。例えば、いきなり小さなボタンから始めるのではなく、穴通しのようなものから順序立てて、その子の手先の動きに適切なものを選んで進めていくことが大切です。

また、2歳になってくると好みが出てきます。ちょっと触ってみて面白くないと思ったら、もう二度と触らないでしょう。虫が好きな子、乗り物が好きな子というように、その子の好きなものは何か、手先の動きはどうかと考えながら工夫してあげるとよいでしょう。

水・砂・土・紙・粘土など様々な素材に触れて楽しむ、これがこの時期の「表現」で大切なことです。また手指の動きも活発になるので、ねじってからちぎるというように「～してから・・・する」ようになります。色を揃えたりする秩序感も必要です。

粘土を置いておくだけでは、コロコロするか長くするかくらいで、なかなか遊びが発展しません。ですから実体験が大切になります。例えば、金魚と遊ぶと粘土で金魚を作ったりします。指針の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」にある「豊かな感性と表現」は、まず豊かな体験があって出てくるものです。

2歳児クラスの子ども達は、本当によく動きます。指針に「自分の体を十分に動かし、様々な動きをしようとする」「走る、跳ぶ、登る、押す、

引っ張るなど全身を使う遊びを楽しむ」と書かれています。

2歳児は色々なことをやりたがります。わざと高い所に上るのが好きで、棚の上に上ったりします。先生が見つけて「あらあら、危ないから降りてちょうだい」と言って振り向くと、別の所で2、3人登っているというように、子ども達は面白そうだと思うと真似をします。子ども達が棚に上るのは「のりたいんだよ」というメッセージです。ですから、バランス感覚を育む遊びを用意してあげると、もう棚の上に乗る必要はなくなります。

もう一つ、色々なものを投げます。ごっこ遊びの食材にしているものや構成遊びのおもちゃ、時には積み木を投げてしまって誰かが痛い思いをすることがあるかもしれません。投げたいのであれば、投げるものを用意してあげるとよいでしょう。けれど、ボールだけでなく枕型もお勧めです。例えば床に四角を書いておくと、そこに投げ入れてみたくなるようです。指示されてやるよりも、思わずやってみたくなる環境を用意しましょう。また枕型の重さを変えるなど工夫してみましょう。同じように投げて、重さが違うものがあると調節しないと入らないからです。それができるようになって子ども達が飽きてきたら、傍にゴムを1本張っておけば、ゴムの上を通して投げるようになるなど、動きが変わるでしょう。そして、これも飽きてくると子どもは自分で遊びを作り出していきます。

他にも、玉転がしも好きです。玉転がしは、必ず思った通りに転がるので安心して遊ぶことができます。2歳児は、癇癪を起こしたり自我を主張したり、人生で一番くせが多い時期だと言われています。意識している部分ではできると思っていますが、無意識の部分では不安もたくさんあるので、指吸いをしてみたりタオルの端っこを持ってみたり、心の杖を求める姿もみられます。一度できたパズルをすぐ壊してまたやり始めるのは、できたことの確認や安心感を得るためです。そういうのも必要なことです。

(3) 言葉の力

2歳は200語くらい、3歳は1000語くらいと、言葉の力が違います。言葉の力の違いは、認知の違いでもあります。1歳半から2歳ぐらいは「あれなに？これなに？」(命名期)、3歳ぐらいになったら「なんで？」「どうして？」(質問期)、そして「だって～なんだもん」と言うように、内容も違います。ですから、2歳だと基本は模倣遊びで、人形相手のお世話遊びが多いですが、3歳になると、言葉のやりとりで役割遊びや役交代が出てきます。

例えば、1歳半では自分の好きな具材だけを入れて、どんどんサンドイッチを作ります。ですが2歳になると、先生のつもりになって人形に食事介助をするようになるので、人形の大きさに適した椅子と机、エプロンなどを用意してあげましょう。模倣することで、やがてその行為の本質に気づいていく、ですから模倣遊びはとても大切です。

では3歳はどうでしょう。今年は新型コロナウイルスが流行し、医師が働く様子がよくテレビで映されていました。そこで、子どもたちがお医者さんの模倣を始めました。担任の先生が「じゃあ、お医者さんごっここの道具を用意しよう」と、聴診器や包帯に見立てたマジックテープ、他にも治療に使えるような用具、それと白衣を用意しました。そして、スカートなど母親や父親役のシンボルになるようなものを一緒に用意しました。すると、お医者さん役だけでなく、診察に来るお母さん役などができます。途中で役割を交代するとき、よく白衣を裏返したまま渡してしまうことがあります。ここで手伝っても構わないですが、子どもが自分でやろうとしているのであれば、手伝わない方がよいでしょう。そのまま手伝わず見守っていると、きっと「次、私お医者さんなの」と白衣を元に戻そうとしながら、嬉しそうに先生の方を見てくれると思います。また、友達がなかなかスカートを渡してくれないときは取りに行ったりします。子ども達はイメージを共有しながら「今、準備してますよ」という現実世界と「はい、役割になりました」という空想の世界を行き来す

る、これが3歳の力です。ですから、やりとりのある遊びを保障するには、丁寧に道具を用意することが大切です。

最後に、遊びの道具があることの大切さについて、体の機能的には話せるけれど、なかなか意味のある言葉が出てこなかった3歳の子どもの話をしましょう。この子は、毎朝必ず観葉植物を倒していました。毎朝倒すので、土もこぼれて片付けも結構大変でしたので、担任の先生が「観葉植物は、しばらく片付けましょうか」と私に相談に来ました。でもこの子のルーティンで、倒した後はパズルなど自分の好きな遊びに向かうのです。ですから、しばらくそのまま様子をみることにしました。この年齢の子ども達は、花にも虫にも心があると思っているので、その子が観葉植物を倒すたびに担任の先生は「あらあら木さん、痛かったかな」と声をかけて元に戻すことをくり返してみました。しばらくして、誰もお医者さんごっこのところにいるいない日に、その子が、とても長い時間をかけて、一生懸命、一人で白衣を着ると、例の木のところに行き、まず木の股のところで体温を測り、それから聴診器で一生懸命診察をして、最後に包帯を巻いてなでていました。言葉は無くても、きっとこの子は木と会話していたのでしょう。毎朝、観葉植物を倒すから、お母さんお父さん達は乱暴な子なのかもと思っているかもしれません。でも保護者会でこんな様子を動画で見せると「ああ、この子は優しいんだ」とわかります。周りの大人が「この子は乱暴だ」と思っている環境で育つのと、「この子は優しいんだ」と思う環境で育つのは大違いです。私たち保育者は、一人一人の子どもの成長の姿を保護者に丁寧に伝えることが求められます。

7. おわりに

遊びの道具があることで、私達はその子の心の育ちを知ることができます。ですから、丁寧に道具を用意して、遊びやすい環境を用意しておくことが大切です。

私たち保育者は、一人一人の遊びを、発達の道

筋にそって総合的に、育ちの背景も考慮しながら
見守ることで、子ども達は、自己を発揮し、生活
の主人公になっていく、これが保育の真髄です。

共同機構研修会第9回

令和2年11月27日

於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館